

日資連が国の認可団体と成る

紺野武郎（日資連会長）

日本再生資源事業協同組合連合会(日資連)は、昭和26年に任意団体として設立し、昭和48年に22都道府県の加盟で関東通産局に法人化の手続きを致しました。そして昨年12月10日には、経済産業省産業技術環境局リサイクル推進課を原局とする全国組織の団体として、国の認可を頂きました。資源循環型3R社会の構築に欠くことのできない組織として認めて頂いたこととなります。

我が国の3R事業には、ごみとして排出する前に、物や資源として取り扱う「なりわい」があり、江戸の昔から長い歴史を重ねています。しかし世界のどの国を見ても、回収作業の殆どがごみ処理業者の仕事と位置付けられています。全国の市町村に地域の資源回収組合があり、県単位でさらに全国規模の連合組織が存在する国も日本以外には見られないようです。廃棄物として扱うのは最後の最後で、あくまでも価値のある物・資源物として、その先の使用者・利用者の立場に立って流通させる仕組みが育まれてきたのです。われわれの仕事は、体の隅ずみの毛細管から集められ静脈の戻ってくる血液の流れにたとえて静脈産業といわれますが、この毛細管の部分が日本の細やかな3R活動に欠くことのできない貴重な機能となって作用してきたわけです。

昨年、大手製紙メーカーの若手グループと懇談する機会がありましたが、古紙は古紙問屋が集め、メーカーに納入するとばかり思っていたとのことでした。各家庭や事業所での日々の分別協力と市民団体や自治体の支援、そしてそれぞれ地域で資源回収に携わる回収業者などの、リサイクル事業を支える目と手と真心のあることを全く知らなかったと驚いていました。自社製品の主原料である古紙の生い立ちとその有り難味を、製紙メーカーの社員が知らなかったということは、殆どの国民も無関心だと言えるのではないかと思います。

資源循環型3R社会を構築するための円軌道の、最も肝心な部分が見えず、痛みも感じてもらえなければ、大企業の大量生産・大量販売の反省など生まれては参りません。このたび日資連が、長年の悲願でありました国の認可を得たと言うことは、この円軌道の見えにくかった部分によろしく光を当てて頂いたものとして、全国の仲間とネットワークを密にし、3R活動に取り組む志を新たにしたところです。

回収現場の日常の活動の中で、我々にしか解らないリサイクルの矛盾・提言・企画などを積極的に訴えて実行に移したいと思えます。廃棄物処理やリサイクル事業にかかるコストや環境負荷、そしてその責任を誰がどのように担うべきか、勇気を持って解明して行かなければなりません。

日資連は、世界中のどの国にも無い再生資源回収事業者とその組織を、市民や自治体の皆様方のご支援を得ながらさらなる充実をはかり、真の3R活動推進の先導役を担えるよう努力して参ります。